

## 14世紀後半のキプチャク汗国とロシア 汗国史へのエチュード(3)

加藤一郎

### Золотая орда и древняя Русь в второй половине XIV века —попытка изложения истории Золотой орды (3)—

Ичиرو Като

“Великая смута” наступила с момента убийства хана Бердибека(1359). За 20 лет сменилось более 25 ханов в Золотой орде. В годы этой смуты центральная власть Сарая не могла управлять всей территорией Золотой орды и превращалась в местную власть. Местные влиятельные эмиры, которые давно устремились стать независимым, установили самостоятельные княжества. Пространство на запад от Нижней Волги вошло в сферу влияния Мамай, одного из влиятельнейших эмиров. В результате этого разделения Золотой орды, северо-восточная Русь оказалась от Сарая оторванной.

Мамай взялся за восстановление зависимости северо-восточной Руси от монголов, почти прекратившейся в годы безвластия в Золотой орде. Он придерживался той же политики на Руси, что и его предшественники, и препятствовал усилению одного из княжеств северо-восточной Руси. В первой половине 60 годов XIV века Мамай поддерживал Московского князя Дмитрия Ивановича против Суздальского князя Дмитрия Константиновича, полувившего ханский ярлык Владимирского великого князя от Сарая. Но когда Московскому князю удалось распространить свое влияние и власть на другие княжества северо-восточной Руси, Мамай решил нанести ему

сильный военный удар. Итак 8 сентября 1380 года произошло сражение на Куликовом поле между войсками Мамай и Руси.

Советские историки считают, что Куликовская победа русских над монголами — величайшая освободительная битва в истории русского народа (Б. Рыбаков). Но по моему они слишком преувеличивают значение этой победы, так как хану Тохтамышу удалось восстановить господство над Русью сразу после Куликовской битвы.

### ジャーニベク汗の殺害と汗国の混乱時代

ジャーニベク汗は、アゼルバイジャン遠征から帰国すると1357年5月にエミールのトグル・バイによって殺され、息子のベルチベクが汗位についたり。ベルチベクは自分のライバルとなる可能性をもつ兄弟たちを殺して、権力紛争を取拾しようとしたが、やはり1359年に殺されてしまい、以後、汗国は、汗国最後の英主トフタムシが1380年に即位するまで、大混乱時代に入る。わずか、20年間のあいだに25名ほどの汗が登場したのである。この時期のキプチャク汗を年表的に整理すると以下のとおりである<sup>2)</sup>。

#### 統一国家時代

クリパ：1359年秋—1360年2月

ノヴルス：1360年

ヒジル：1360年春—1361年

チムール・ホジャー—1361年

ママーイが反乱を起し、アブラフを汗とする—1361年

オールドメリク—1361年

キルチベク—1361年

ママーイがヴォルガ以西の地域を占領し、キプチャク汗国はサライ政権とママーイ政権に分裂する。

サライ政権

ミュリト：1361—1363年  
ハイル・プラト：1363年  
アブドラフ：(ママーイが短期間  
サライを占領したため)  
プラト・ホジャ：1364年  
アジス・シェイフ：1364—1367年  
アブドラフ(再度ママーイがサラ  
イを占領したため)  
プラト・チムール：1367年  
ジャニベク2世：1367年  
ハサン：イスラム暦771年  
(1369—1370)  
トゥルンベク・ハトゥン：同773年  
(1371—1372)  
? ? ?  
カガンベク：同777年(1375—1376)  
ジャニベク3世：同777年  
アラブシャフ：1377年  
ウルス：1377年

ママーイ政権

アブドラフ：1361—1369年  
ムハメッド・ブラク：1369—1375年  
トゥルンベク：1375—1380年  
トフタムイシ：1380年以降

ローマ帝国の「軍人皇帝時代」にも比すべきこの時代に、汗国の国勢は急速に低下していった。第一に、サライのキプチャク汗の権威はその全版図にはいきわたらなくなった。たとえば、1360年に汗位についたノヴルス

はその本拠地をヴォールガ川流域においており、ロシアの年代記では「ヴォールガのツァーリ」と呼ばれている<sup>3)</sup>。また第二のノガイともいえるママイは、ヴォールガ以西の地域を支配下におき、サライの汗とは別の汗（アブドラフ、ムハメッド・ブラク、トゥルンベク）を「政治的あやつり人形」としてたてていたから、正式の汗の権威はこの地域には及ばなかった。さらに、後述するように、かねてから分離主義的な傾向をもっていた地方の有力エミールたちが、中央権力の弱体化という混乱を利用して独立公国を形成しはじめていた。すなわち14世紀後半には、ヴォールガ川東岸にはブラト・チムール公国、西岸にタガイ公国が形成され、ヴォールガ川中流域はサライの汗の手から切り離されてしまったのである。

第二に、それまでキプチャク汗国の汗位についたのは、バドゥ家の血筋をひく王侯だけであったのが、この混乱時代には、はじめてオルダ・イチェン家（青帳汗国）の血筋から汗位につく者が登場するようになった。たとえば、ヒジル汗は、青帳汗国の支配者シニブカの息子であった。このことは、ジュチ・ウルスの右翼（バドゥのウルス、狭義のキプチャク汗国）の汗やエミールたちが、相互の抗争のために、もはや汗国の有力な政治的中心たりえなかったことを意味している<sup>4)</sup>。のちに、汗国を再統一することになるトフタムイシ汗も、このオルダ・イチェン家出身の汗であったのである。

### 諸公国の分立

以上のような汗国の混乱時代には、汗の権威が地域的に限定され、しかも、同時に二人の汗が登場したりしたために、サライの中央権力の威勢は地におちていた。かねてから分離主義的な傾向を示しつつあった地方の有力エミールたちは、こうした事態を利用して、サライから独立した公国を形成するようになっていた。

その一つは、ブルガール地方で活躍していたブラート・チムールが1361年にブルガール地方とヴォールガ川東岸地方に独自の支配圏を設定したブラート・チムール公国である。年代記には「汗国の公であるブラート・チムールはブルガール地方とヴォールガ川岸のすべての諸市、ウルスを占領し、すべてのヴォールガの交通路を奪った」<sup>5)</sup>とある。また、ヴォールガ西岸には、やはり汗国の公タガイがリャザーンの東、タムボーフの北に位置するナロフチャトを中心に独立公国をうちたてていた<sup>6)</sup>。有力なエミールたちがサライの支配を脱して、独立公国を形成するという傾向は、この二つの公国だけのことではなかった。イスラム世界最大の歴史家イブン・ハルドゥンはこう記している。「やはり、若干の(その他の)モンゴル人エミールがおり、彼らはサライ周辺地域の領地の統治をわかちあっていた。彼らは互いに反目しており、自分の所領を独立して支配していた。こうして、ハジ・チェルケスはアーストラハンの周辺地域を、ウルス汗も自己の分封地を領有し、またアイベク汗も同様であった。彼らすべては行軍のエミール(左翼のエミール)と呼ばれていた。ベルヂベクが死に、(最高)権力がなくなると、これらの(エミール)が地方において独立して支配した。」<sup>7)</sup>

また、この混乱時代にホレズム地方がキプチャク汗国から分離し、そこにイスラム教神秘主義派＝スーフィ派の政権が生まれた。ホレズム市での汗国最後の鑄造貨幣はヒジル汗の貨幣であるから、この政権の樹立は1360年以降のことであろう<sup>8)</sup>。

### 混乱時代とルーシ

汗国の混乱時代の初期、正確に言えばベルヂベクの死後からチムール・ホジャの治世(1361)まで、北東ルーシに対する汗国の支配は、汗国宮廷での内紛にもかかわらず動揺せず、ルーシ諸公はクリパ、ノヴルス、ヒジルの各汗の即位にあたって旧来どおりサライ詣でをしている。汗国のルー

シ支配が動揺するためには、「キプチャク汗国の分裂という激変が必要であった」<sup>9)</sup>のである。

この激変は、汗国の有力なエミールであるママーイがサライから独立して、ヴォールガ以西の地域を支配するようになったことでもたらされた。ママーイは、「ベルヂベクの娘ハヌムは、ママーイという名の古いモンゴル人エミールの一人と結婚し、このママーイはベルヂベクの治世において万事をとりしきっていた」<sup>10)</sup>(イブン・ハルドゥン)と記されているように、混乱時代以前から汗国の実力者であったが、ついにサライの汗とは別個の自分の汗を擁立し、汗国を二分したのである。

さて、ウラヂーミル大公位は、イヴァーン・カリターの死後も、セミョーン・イヴァノヴィチ(1341-53)、イヴァーン・イヴァノヴィチ(1353-59)というようにモスクワ大公家に継承されていた。ところが、1360年、クリパ汗を殺害して汗位についたノヴルス汗は、前大公イヴァーン・イヴァノヴィチの息子ドミートリイ・イヴァノヴィチ(のちのドンスコイ)ではなく、スーズグリ公ドミートリイ・コンスタンチノヴィチに大公位のヤルリイクを与えた。年代記も「この任命は父祖の土地の制度、先祖から土地の制度にそっていない」<sup>11)</sup>と記しており、さらに、この当時すでにウラヂーミル大公位はモスクワ大公家の「世襲的財産」と考えられつつあったのだから、スーズグリ公をウラヂーミル大公に任命したことは異例のことであった。しかし、サライの宮廷では内紛が続いていたとはいえ、ルーシ諸公のあいだでの汗の権威はまだ高く、不満を抱いていたと思われるドミートリイ・イヴァノヴィチも承服するほかはなかった。さらに、その他のルーシ諸公も「本領安堵」を求めて、ノヴルスの宗主権を承認した。したがって、この時点では、「ルーシに対する汗国の支配体制はいまだ効力を残していた」<sup>12)</sup>といえる。

ところが、1361年に汗国が分裂して、汗国東半部を支配するサライ政権

と、西半部を支配するママーイ政権が互いに抗争するようになると、この事態は北東ルーシの政治的関係に強く作用した。ママーイ(名目上はアブドラフ汗)は、サライ政権がスーズダリのドミートリイ・コンスタンチノヴィチをウラヂーミル大公位につけていたのに対抗して、モスクワのドミートリイ・イヴァノヴィチに大公位を与えたのである。北東ルーシは地理的にママーイ政権の勢力圏に近く、ママーイの意向の方が現実的な威力をもっていたために<sup>13)</sup>、モスクワ公ドミートリイは、軍勢とともにスーズダリ公ドミートリイを攻め、彼をウラヂーミルから追放してしまった。

サライ政権側は、なおもスーズダリ公ドミートリイにてこいれしようとして、1364年、使者を介して、彼に大公位のヤルリイクをおくった。だが、すでにモスクワ公国が強力になりつつあること、サライ政権が北東ルーシに対しては現実的な力をもっていないことを自覚していたスーズダリ公ドミートリイは、大公位の受諾を拒否した。これを契機に、それまで大公位をめぐる争っていた両ドミートリイ、およびモスクワ公国とスーズダリ・ニジェゴロト公国は和解へと向い、1366年には、モスクワ公ドミートリイが、スーズダリ公ドミートリイの娘エヴドキアを妻とし、両公国のきずなが深められた。

こうしてモスクワ公ドミートリイはウラヂーミル大公位を確保したものの、今度はドヴェーリ公ミハイール・アレクサンドロヴィチの挑戦を受けねばならなかった。紛争の直接的な原因は、トヴェーリ公ミハイールと、その伯父ヴァシーリイ・ミハイロヴィチ、従兄弟エレミア・コンスタンチノヴィチとの紛争にドミートリイが介入して後者を支援し、これに対してトヴェーリ公ミハイールは、リトヴァの援助をあてにしたことであつた。またリトヴァ大公アルギルダス(オリゲルト)の積極的なロシア進出政策にとっても、強力なモスクワ公国の存在は障害となっていたために、リトヴァはトヴェーリ公国に加担した(ミハイールはアルギルダスの妹と結婚して

いる)<sup>14)</sup>。1367年秋、ミハイールはリトヴァの援兵ともに、ヴァシーリイとエレミアを攻撃したが、モスクワ公ドミートリイは策略を使って、このミハイールを逮捕した。

だが、ここでママーイ政権は、このモスクワ・トヴェーリ紛争に干渉した。ママーイは、カラチャイ、オヤングル、チュチェカシの三名の使者をモスクワに派遣し、逮捕・拘禁されていたミハイールを釈放させたのである。ママーイは前述したように、かつてはサライ政権との対抗上、モスクワのドミートリイを支援していたのであるが、急速なモスクワの台頭を危慮して、今度はトヴェーリを支援するようになったのである。この意味で、ママーイは勢力均衡の観点から北東ルーシ諸公国のなかで弱者を支援するというかつての汗国の対ロシア政策を踏襲していたといえる。

1368年秋、ドミートリイはトヴェーリを攻撃し、ミハイールはリトヴァへの逃亡を余儀なくされた。しかし、今度はリトヴァ軍がモスクワに侵攻し(リトヴァの第一次侵攻)、トロストナ河畔の戦いでモスクワ軍を撃破したのち、三日間にわたってモスクワを包囲し周辺地域を略奪したために、ドミートリイはミハイールに譲歩せざるをえなかった。1370年、ドミートリイは再度トヴェーリを攻撃した。ミハイールは再びリトヴァに逃亡し、アルギルダスの支援を求めたが、アルギルダスはドイツ騎士団との紛争に忙殺されており、ミハイールを支援できなかったために、ミハイールはママーイにすがった。ママーイ政権のムハメッド汗はミハイールにウラヂーミル大公位のヤルリイクを与えたが、実際の支援兵力を提供しなかった。そこで、ミハイールはウラヂーミル大公位のヤルリイクと汗使サリ・ホジャとともに、ルーシに帰還しようとしたが、ドミートリイに阻止され、再度リトヴァに逃亡した。アルギルダスは今度はミハイールの要請を受け入れて、1370年11月、モスクワに侵攻した(リトヴァの第二次侵攻)ものの、ドミートリイも準備を整えていたために、リトヴァ軍はさしたる戦果もあ



げずに撤退した。

リトヴァの支援をあてにできなくなったミハイールは再度ママーイにすがった。1371年、ミハイールはママーイのもとを訪れ、大公位のヤルリイクを受けて、汗使サリ・ホジャとともにウラヂミールに向った。だが、ドミートリイはもはやママーイの意向に従おうとはしなかった。汗使サリ・ホジャがドミートリイをウラヂミールに召喚しようとしたとき、ドミートリイは「ヤルリイクのもとには行かない、ウラヂミール大公国の土地には(ミハイール)を入れない、汗使であるあなたには道が開かれている」<sup>15)</sup>との拒否回答をした。この回答が示しているように、ドミートリイはもはや大公位が汗のヤルリイクによって与えられるものではない、すなわちルーシに対する汗の宗主権を否定しようとしていたものの、汗国との直接対立の道に踏みだしたわけではなかった。彼は、汗使サリ・ホジャに十分な贈り物を与え、みずからママーイのもとを訪れ、「必要である人にはすべて、物惜しみをせず、贈り物をし、そのために大公位のヤルリイクを手に入れた。」<sup>16)</sup>

一方、ミハイールもリトヴァの協力をもとにモスクワへの攻撃を継続していた。1372年中頃、トヴェーリ・リトヴァ連合軍は、リュブツク近くでモスクワ軍と衝突したが、敗北した。この結果、同年にはリトヴァとモスクワとあいだで、翌年にはモスクワとトヴェーリのあいだで和解条約が結ばれた。後者の条約にしたがって、ドミートリイは自分の手中にあったミハイールの息子を釈放し、ミハイールは、自分が占領したモスクワ公国の諸郷から自分の代官を引きあげた。

こうして、モスクワのドミートリイは、北東ルーシの盟主としての地位を着々と固めつつあったのであるが、モスクワの急速な成長を危慮したママーイは再度弱者であるミハイールにてこいれしようとした。ミハイールはモスクワからの亡命者イヴァーン・ヴェリヤミノフとネコマート・スロジャーニンとをママーイ政権のもとに送った。両者ともモスクワの有力な

貴族であり、権力を集中しつつあったドミートリイと対立してトヴェーリに逃れてきていたのであるから、おそらくママーイにドミートリイの危険性について忠告したのであろう。ママーイはミハイールに大公位のヤルリイクを与え、汗使アチ・ホジャをトヴェーリに派遣した。ミハイール自身はこの当時リトヴァに出かけており、その援助を約束されており、その上ママーイの支援も確保することができたので、1375年7月、再びモスクワに宣戦した。

ドミートリイもこれに対抗して軍を動員し、ほぼ北東ルーシのすべての諸公がこれに呼応して、トヴェーリに進撃した<sup>17)</sup>。あてにしていたリトヴァとママーイ政権からの援兵を得られなかったミハイールは、このドミートリイの大軍に直面して、ドミートリイに和を請わなくてはならなかった。和約によると、ミハイールはウラヂーミル大公位への野心を放棄すること、かねてからミハイールと対立していたカシン公国の独立を承認すること、ミハイールはドミートリイの弟となること（すなわちドミートリイに政治的に従属すること）が決定された。注目すべきは、汗国への態度に関して、「タタール人が予や汝のもとに侵攻してきたならば、予と汝とは協力して彼らにあたる」<sup>18)</sup>とのとり決めが結ばれたことである。キプチャク汗国はいまやルーシの宗主ではなくルーシの敵とみなされはじめたのである。

### クリコーヴォの戦い

モスクワがルーシの盟主として強力になるにしたがって、モスクワのドミートリイとママーイ政権とのあいだの亀裂は深まっていった。ママーイがミハイールに大公位のヤルリイクを与えたことは、明らかにママーイの懸念の表現であった。

ママーイはまず、1374年に汗使と1,500名の軍をスーズダリ・ニジェゴロト公国に派遣し、同公国をモスクワへの政治的従属から強制的に離反させ

ようとした。ところが、ニジェゴロトの住民はこれらの汗使と軍の多くを殺害し、スーズダリ・ニジェゴロト公ドミートリイ・コンスタンチノヴィチ（彼の娘はモスクワのドミートリイに嫁いでいた）も、この住民の行動を承認した。当時、このスーズダリ・ニジェゴロト公ドミートリイはモスクワに逗留中であったのだから、彼の反ママーイ的政策はモスクワのドミートリイの意図に沿っていたと思われる。

1377年に入ると、アラブ・シャの軍がニジェゴロトに進撃してきた。アラブ・シャは青帳汗国の皇子であり、ヴォールガ川を越えてママーイの支配領域に進入してきた。彼とママーイとの関係は判然としていないが、この進撃は何らかの事前の了解をママーイからとりつけていたことであろう<sup>19)</sup>。アラブ・シャ軍の接近を知ったスーズダリ・ニジェゴロト公ドミートリイは、すぐさまモスクワのドミートリイに支援を要請し、後者はすぐさまニジェゴロトに援軍を派遣した<sup>20)</sup>。両軍はピヤナ河畔で遭遇し、ロシア側が敗北して、ドミートリイ・コンスタンチノヴィチの息子イヴァーン・ドミトリエヴィチなど多くが戦死した。勝利を収めたアラブ・シャ軍は、ニジェゴロト市を占領・略奪した。また、翌1378年にはママーイの軍もニジェゴロトに侵攻した。

一方、ママーイ政権と対立するサライでは、のちにママーイを打倒してキプチャク汗国を再統一することになるトフタムイシ汗が頭角をあらわしており、ママーイの支配領域に進出しようとしていた。したがって、ママーイは「トフタムイシに対する遠征を実施して、モスクワを強力にしたままでおくか、それとも最初にモスクワを打ちまかして、それからルーシの軍勢に補強されて、トフタムイシにあたるか」<sup>21)</sup>というディレンマに直面していたのであるが、ピヤナ河畔の戦いでルーシ軍の敗北、ニジェゴロト占領などをみて、まずモスクワを中心とするルーシをたたくことを決意した。

1378年、ママーイはベギチ指揮下の軍をルーシの地に派遣した。これに

対して、モスクワ公ドミートリイの指揮するルーシ軍は、先年のピヤナ河畔の戦いでの敗北の経験をふまえて、軍事的な準備をおこたらなかった。1378年8月、両軍はリャザーン公国の北部のヴォジャ河畔で衝突し、ルーシ軍が勝利を収めた。このヴォジャ河畔の戦いは、汗国軍・モンゴル軍に對して、バトウの遠征以来はじめてロシア側が勝利した戦いであった。

ヴォジャ河畔での敗戦を知ったママーイは、モスクワ公国を討伐すべく、より周到な軍事的、外交的準備を進めた<sup>22)</sup>。まず、彼は自軍をジェノヴァ人、チェルケス人、ヤス人の兵で補強した。とくにジェノヴァ人歩兵は、この当時、その装備・練度の点で高い評価をえていた。ついで、彼はリトヴァとリャザーン公国と同盟を結んだ。1377年にアルギルダスをついでリトヴァ大公になっていたヤガイロにとっては、モスクワの強大化はリトヴァのルーシ進出（当時、ロシアの統一の主導権をめぐるモスクワ・ルーシとリトヴァ・ルーシが争っていたと考えれば、リトヴァによるルーシの統一）の障害であり、1379年にはモスクワのドミートリイがリトヴァ大公位の継承をめぐる内紛に乗じてリトヴァを攻撃していたから、ママーイとの同盟は当然であった。これに對して、リャザーン公国の立場は複雑であった。1373年、1377年とモンゴル軍の侵入を受けて荒廃していたリャザーン公国は、いずれにせよママーイ軍とモスクワ軍の進路、戦場になることが予想され、リャザーン公オレーク・イヴァノヴィチはママーイとドミートリイといずれに加担しても難しい立場におかれるからである。このために、彼は、モスクワを打倒したあかつきにはママーイの従臣としてのルーシの地をヤガイロと二分して統治するというママーイ側の条件にひかれて、基本的にママーイに加担したけれども、ドミートリイにも友好的な態度を示そうとした<sup>23)</sup>。

こうして軍事的、外交的な準備を完了したママーイは、まずドミートリイに使者を派遣して、ママーイ政権の従臣になること、ウズベク汗の治世

にウラジーミル大公が汗国に支払っていたのと同額の貢税を支払うことを、すなわち汗国のロシア支配を名実ともに再建することを要求した。ドミートリイはこの最後通牒的な要求をすぐさま拒否したわけではなかったが、ママイ軍の接近を知ると、戦いを決意し、諸公の軍勢を動員した。諸公軍は8月15日までにコロームナに終結することとされた<sup>24)</sup>。

ルーシ側の計画は、ママイガリトヴァ大公やカイロの軍、リャザン公オレーク<sup>25)</sup>の軍と合流する地点であったオカ川を越えて、もっと南下してママイ軍を迎え撃つことであった。ルーシ軍は9月8日にドン川を越え、その支流ネブリャドヴァ川の右岸に布陣した<sup>25)</sup>。自軍の背後にドン川とネブリャドヴァ川をおいたことは、ルーシ側の不退転の決意をあらわしているとともに、戦術的にはママイ軍の騎兵が迂回してルーシ軍の側面や背後を奇襲することを困難にしていた。ルーシ軍の布陣は、騎兵からなる前哨部隊、歩兵からなる先遣部隊が前衛を構成し、その後に右翼部隊、主力部隊、左翼部隊（この三部隊は、両翼の騎兵が中央の歩兵をとりかこむというように組立てられていた）が配置され、後方に予備部隊と騎兵からなる伏兵部隊が配置されているというものであった。<sup>26)</sup> 一方、ママイ軍の布陣は、軽騎兵からなる先遣部隊、歩兵（ジェノヴァ人傭兵も含む）からなる中央部隊、騎兵からなる右翼部隊と左翼部隊といったものであった。

9月8日朝はじまる「クリコーヴォ平原の戦い」は、三段階に分けられる。第一段階では、ルーシ軍の前哨部隊および先遣部隊とママイ軍の先遣部隊が衝突し、前者が敗北して後退した。第二段階では、両軍の主力が遭遇した。ママイ軍の右翼の騎兵が、ルーシ軍の左翼を強襲して、ルーシ軍の中央主力部隊を包囲しようとしたが、その戦線が伸びきったところで、ルーシ軍の伏兵部隊が投入され、ママイ軍の右翼の騎兵が混乱して、後退しはじめる。第三段階では、自軍の右翼の後退を知ったママイ軍全体が混乱におちいって逃亡しはじめ、これをルーシ軍が追撃して勝利を取

める。

このクリコーヴォの戦いの勝利は、モンゴル人に対するロシア人のはじめの大勝利であった。このために、過度に「愛国的」なソ連邦の歴史家たちはこの勝利を過大評価しがちである<sup>27)</sup>。しかし、ルーシ側にとってはこの戦いが総力をあげたものであったのに対し、ママーイ側にとっては様々な戦線の一つであり、十分な予備をまだ確保していたことに留意しなくてはならない。事実、ママーイは第二のルーシ遠征を準備していたのであるが、これが実行されなかったのは、同じモンゴル人のトフタムイシ汗との権力闘争に敗北したためであった。そして、このトフタムイシ汗は、1382年にモスクワ遠征に勝利を収め、汗国のルーシ支配を再建するのである。

(続く)

注

- (1) 「ベルヂベクの即位 (アゼルバイジャンの支配者としての・・・引用者) から6ヶ月たつと、ジャニベクは病気にかかった。彼の重臣トグル・バイはすぐさまアゼルバイジャンに人を送り、ベルヂベクをよび戻した。それは、彼の父が死んだ場合には、彼に王国を与えるためであった。ベルヂベクはデシット・イ・ベルケ(『ベルケの草原』という意味であるが、ここではベルケ汗の国土を指している・・・引用者) の汗位への愛着のために、アゼルバイジャンを棄て、すぐさまデルベンドを越えて、汗国に赴いた。彼は、10人の従者とともに、夜はトグル・バイの家に身をおいていた。たまたま、ジャニベク汗は回復し、病床から身をおこして、翌日には、ふたたび長椅子にすわりたがった。ベルヂベクの到着を知っていた一人の信頼できる人物がジャニベクにこの事情を伝えた。ジャニベクは不安になった。この件をトガイ・トグル・ハトゥンと相談した。夫人は自分の息子への愛情から、この噂が嘘であると説明しようとした。ジャニベクはこの紛争の張本人がトグル・バイであることを知らないで、彼を個室に呼びだして、この秘密について彼と話しはじめた。トグル・バイは驚き、調査するとの口実を使って退出し、すぐさま(自分に同調する)数名の者にとってかえして、じゅうたんの上でジャニベクを殺してしまった。(アノニム・イスカンデラ) Г. Тизенгаузен, Сборник материалов, относящихся к истории золотой орды, извлечения из персидских сочинений (далее: Тизенгаузен II), стр. 128. これに対して、ジャニベクは自然死したという史料もあるが、多くの研究者は『アノニム・イスカンデラ』の記述を支持している。
- (2) В. Егоров, Развитие центробежных устремлений в золотой орде, "В И", 1974, No.8, стр. 47.
- (3) たとえばシメオン年代記は、ノヴルスの国家を「ヴォールガの王国」

と記している。「同年の春、ヒドウイル(ヒジル)という名のツァーリが東からヴォールガの王国にやってきた。・・・ナブルス(ノヴルス)ツァーリはヒドウイルによって殺害された。」 ПСРЛ, том 18, стр. 100.

- (4) フョードロフ・ダヴィドフはこう説明している。「・・・すでに1360-1370年頃、サライその他のヴォールガ川流域の都市はもはや国家を統一する能力をもつセンターではなくなっていた。ここには、この都市が強力な君主を擁立して統一的・中央集権的スローガンと力を提供して、依拠することのできる社会勢力が存在しなかった。西方のウルスの貴族層もこのような勢力たりえなかった。彼らは一時的にママーイによって統一されたけれども、最高権力の獲得をめざして汗と抗争していた。ある意味で、14世紀末にこのような勢力たりえたのは、左翼(オルダのウルス・・・引用者)の貴族層だけであった。彼らはシルダリアの諸市と結びついており、ジュチの国家の統治にあたって、キプチャク汗国の西方の貴族層と交代した。」 Г. Федоров-Давыдов, Общественный строй золотой орды, М., 1973, стр. 149.
- (5) ПСРЛ, том 18, стр. 101.
- (6) М. Сафаргалиев, Распад золотой орды, Саранск, 1960, стр. 119.
- (7) Тизенгаузен II, стр. 389-390.
- (8) М.Сафаргалиев, указ. соч., стр. 120-121.
- (9) А. Насонов, Монголы и Русь, М., 1940, стр. 122.
- (10) Тизенгаузен II, стр. 389.
- (11) ПСРЛ, том 18, стр. 100.
- (12) Л. Черепнин, Образование русского централизованного государства в 14-15 вв., М., 1960, стр. 552.
- (13) ナソーノフは「北東ルーシはサライから切り離されていた」と記して



いる。А. Насонов, указ. соч., стр. 124.

- (14) チェレプニン是这样説明している。リトヴァ大公アルギルダスの目的は「第一に、モスクワ大公との闘争においてトヴェーリ大公を支援し、モスクワ公国を犠牲にしてトヴェーリ公国の強化を促進することであった。・・・第二に、アルギルダスにとって、これはモスクワ公国の力を試すために、はじめての重大な軍事的偵察であった。最後に、アルギルダスは自分の戦士に、ロシアの住民を心ゆくまで略奪する可能性を与え、・・・モスクワ公国の物的資源を破壊するためにそこに荒廃させるように命じた。」Л. Черепнин, указ. соч., стр., 564.
- (15) А. Экзенплярский, Великие и удельные князья северной руси в период с 1238 по 1505, том I, стр. 102.
- (16) там же, том II, стр. 490.
- (17) 年代記によると、ドミートリイに加担したのは、スーズダリ公ドミートリイ・コンスタンチノヴィチ、セルプホフ公ウラヂーミル・アンドレエヴィチ、ニジェゴロト公ボリース・コンスタンチノヴィチ、ロストーフ公アンドレーイ・アレクサンドロヴィチ、スーズダリ公ドミートリイ・コンスタンチノヴィチ・ノゴチ、ニジェゴロト公セミョーン・ドミトリエヴィチ、スモレーンスク公イヴァーン・ヴァシリエヴィチ、ヤロスラーフ公ヴァシーリイ・ヴァシリエヴィチ、ペローゼル公フョードル・ロマノヴィチ、カシン公ヴァシーリイ・ミハイロヴィチ、モロガ公フョードル・ミハイロヴィチ、スタロドoup公アンドレーイ・フョードロヴィチ、ロストーフ公ヴァシーリイ・コンスタチノヴィチ、ロストーフ公アレクサーンドル・コンスタンチノヴィチ、ヤロスラーフ公ローマン・ヴァシリエヴィチ、ブリャンスク公ローマン・ミハイロヴィチ、ノヴォシリスク公ローマン・セミョノヴィチ、オボレンスク公セミョーン・コンスタ

ンチノヴィチ、タルスク公イヴァーン・コンスタンチノヴィチである。

ПСРЛ, том 18, стр. 115—116.

(18) А.Экзенплярский, указ. соч., том I, стр. 107.

(19) там же, стр. 413.

(20) チェレブニンはこうしたドミートリイの迅速な行動をみて、「この当時すでにモスクワ政府は、タタル・モンゴル人の侵入からルーシの国境を守るために、防衛的措置をとることに限るだけではなく、この侵入を予防しようとして汗国に対する攻勢に転じていた」と述べている。Л. Черепнин, указ. соч., стр., 587.

(21) G. Vernardsky, *The Mongols and Russia*, L. 1953, p. 256

(22) ママーイ軍の構成と人数については、年代記などでも誇張や不正確な記述が多く、判然としていないが、エゴーロフはこう述べている。「ママーイが集めた軍勢は、基本的に遊牧民の兵卒から構成されており、彼らは、ステップ地帯での行動に慣れた機動的な軽騎兵隊に組織されていた。傭兵部隊は、優秀な軍事技術と経験をもっていたとはいえ、数は少なかったために、重要な役割ははたさなかった。ママーイ軍の総勢を決定することはかなり困難であり、間接的な方法でしか決定することはできない。たとえば、比較のために、テブリース遠征のために1385年に集められたトフタムイシ軍の数字をあげてみよう。同時代人はこの軍隊を『9トウメン（すなわち9万人）の大軍』と記している。このさい、トフタムイシは統一された国土から戦士を集めることができ、ママーイはといえば、ヴォールガ以西の土地からだけ集めることができたことを念頭におかなくてはならない。そうすればクリコーヴォの戦いでママーイの指揮下に入ったのは、5万から6万人であると推定しうる。」В. Егоров, *Золотая Орда перед Куликовской битвой*, В кн.: *Куликовская битва*, М., 1980, стр.

212-213.

- (23) エグゼンプリャールスキイは、リャザーン公オレークの立場、行動をこう記している。「オレークは進退きわまった。すなわち、こうした情勢のもとでは、彼はずるがしこく慎重に行動することを余儀なくされた。彼はママーイと秘密に接触し、リャザーン諸公がウズベクの時代に提供していた貢税を提供し、自分の軍勢をタタール軍に加入させることを約束した。またオレークはママーイの盟友であるリトヴァ大公とも条約を結び、それは十字架宣誓によって確固としたものとされた。これらのことは、リャザーンの貴族エピファン・カレーエフの介して、秘密に行なわれた。だから、ドミートリイ・イヴァノヴィチはオレークの行動について、今のところ疑っていなかったし、少くとも疑念をあらわしてはいなかった。オレークはたとえ表面的にはあっても、モスクワ公と友好的な関係を維持しようとした。すなわち彼は、ドミートリイ・イヴァノヴィチに迫りつつあるママーイの脅威・危険を通報したのである。」 A. Экзенплярский, указ. соч., том II, стр. 586-587.
- (24) コロームナに終結した軍の人数についても、論争が続けられている。ベスクロヴヌイはこう述べている。「年代記作者はコロームナに集結した軍の人数を様々に数えている。ある者はドミートリイ公は『20万以上の軍勢を』集めることに成功したと記しているし、またある者は30万とも40万ともいう数字をあげている。しかし、こうした史料が集結した軍の人数を多く見積っていることは明らかである。モスクワは7万ほどの軍勢を決起させることができたという方が信頼できる。」 A. Бескровный, Куликовская битва, В кн.: Куликовская битва, М., 1980, стр. 226.
- (25) クリコーヴォの戦いの会戦地はネプリアドヴァ川右岸であるというのが定説であったが、クーチキンが史料、地理学資料、地名資料を検討し

て、両軍の主力が遭遇したのはネプリヤドヴァ川左岸であったという結論をだした。これに対して、スクルインニコフが反論しているが、ここでは定説に従っておく。Р. Скрынников, Куликовская битва. Проблемы изчисления, В кн.: Куликовская битва в истории и культуре нашей Родины, М., 1983, стр. 54—57.

- (26) 実はルーシ軍の軍制はモンゴル軍のそれを模倣したものであった。ヴェルナツキイはこう述べている。「最初はモンゴル人を敵としてむかえ、ついで長期にわたって彼らの臣民となったロシア人が、モンゴル軍の軍制に関する十分な知識を習得し、その優秀さに感銘を受けざるをえなかったことは疑いはない。・・・したがって、不可避免的にロシア軍は、モンゴル軍の様式を自分の軍隊に持ちこんだ。たとえば、15世紀後半と16世紀にモスクワ国家の軍隊は五つの主要単位に分けられていたが、これはモンゴル軍の様式を踏襲したものであった。この単位はロシア語では полки として知られている。中央 (большой полк、大部隊という意)、右手部隊 (правая рука)、左手部隊 (левая рука)、先遣部隊 (передовой полк)、後衛部隊 (сторожевой полк) という具合である。右手と左手という用語は、チュルク語の ong kol, son kol に対応している。ロシア人は、両翼から敵を包囲するというモンゴル人の戦術にも親しんだ(1378年のヴォジャ河畔の戦いはその実例である)。さらに、ロシア人はモンゴル人の鎧、武器を自分たちの軍隊に持ち込んだ。・・・16世紀のモスクワ国家の軍も、明らかにモンゴルの影響を受けていた。」G. Vernadsky, op. cit. p. 363.
- (27) たとえば、ルイバコーフは、「1380年9月8日のクリコーヴォ平原での会戦は、ロシア民族の歴史のなかでもっとも偉大なる解放戦争の戦闘であった」と述べているし、グレコーフは、「1380年9月8日にクリコーヴォ平原でママーイの軍とドミートリイ・ドンスコイの連合軍とのあいだで行なわれた会戦は、ウラヂーミル大公国だけではなく、リトヴァ・ルー

シ・ジェマイト大公国の政治生活、東ヨーロッパの政治生活のなかで重要な事件であった」と述べている。Б. Рыбаков, Куликовская битва, В кн. Куликовская битва в истории и культуре нашей Родины, стр. 5. И. Греков, Восточная Европа и упадок золотой орды, М., 1975, стр. 127. こうしたソ連邦の歴史家の主張に対して、欧米のロシア史家は概して、クリコヴォの戦いの意義を低く評価し、この戦いはキプチャク汗国の宗主権をほとんど動揺させなかったとみなしている。たとえば、ハルペリンは「・・・1380年のモスクワの戦勝はキプチャク汗国の勢力圏におけるロシアの地位をほとんど変えなかったし、タタールのくびきも揺がなかった。・・・この戦闘はモスクワにとって負担が重かった。ドンスコイのてがらをきわめて修辭的に讃えた『ママーイの合戦の物語』は、ママーイに対して進撃した30万のうち253,000が帰還しなかったと記している。この誇張された数字を信じることはできないが、モスクワがぎりぎりの勝利を収めたことは明かである。ロシア側の損害は大きかったので、モスクワはこの勝利に乗じてさらに軍隊を派遣することはできなかった。一方、ママーイはさらなる軍隊を動員して、ロシアに対する第二の遠征を準備していた。」と述べている。C. Halperin, *Russia and the Golden Horde*, Bloomington, 1985, p. 56.